

1 天皇号と国名の由来を解説

は、日本と同句麗が手を合わせることを経て百濟、加百するが野妹子に返礼の使者をつけた。

天皇号の始まり

翌年の608年、3回目の遣隋使を派遣することになった。そのとき、国書に記す君主の称号をどうするかが問題となった。中国の皇帝の怒りをかった以上、中国の君主と同じ称号をとすることはできない。しかし、再び「王」と称し、中国に冊封される道を選びたくはなかった。

「本」は、「……の元」ということ。ですから、「日本」という国名は、607年の遣隋使の国書に「日出づる処」と書かれていたように、「昇る太陽の出るところの国」という意味になります。

これは、自分たちの国にゆるぎない自信をもち、その歴史にも誇りをもった古代のご先祖様が、わが国にもっともふさわしい国名として選んだものといえます。

そこで、このときの手紙には、「東の天皇つしみて、西の皇帝にもうす」と書かれた。皇帝の文字をさけることで隋の立場に配慮しつつも、「皇」の文字をみずからの称号に使うことで、両国が対等であることを表明したのである。これが、天皇という称号が使われた始まりだった。日本の自立の姿勢を示す天皇の称号は、その後使われつづ

はじめてわかったわ



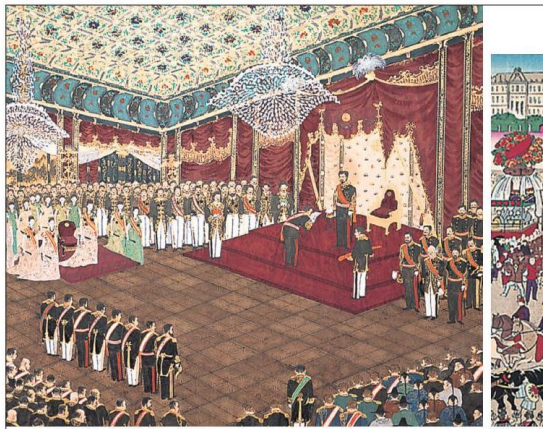
2 7世紀と19世紀2度の国づくりの快挙

敗戦を教訓にした律令国家

7世紀なかば、東アジアは動乱の中にあった。強大な唐帝国に脅威を感じた朝鮮半島の国々は中央集権化を進めていた。しかし、百濟、新羅、高句麗の3国は、古来、激しい抗争をくり返しており、唐の軍事介入を招いた。

まず、唐・新羅軍は百濟を滅ぼし、次いで高句麗を南北から狭み撃ちにして滅亡させた。日本は百濟の救援に赴いたが、百戦錬磨の唐軍に対して、日本は各豪族軍の寄せ集めで作戦もまとまらず、大敗を喫した。

敗戦後、天智天皇は国家の危機を感じて中央集権化と律令の整備につとめた。天智・天武天皇は東アジアの興亡と敗戦の経験を教訓に国づくりを進めたのだった。



大日本帝国憲法の発布 1889(明治22)年2月11日、前年10月に完成したばかりの皇居新宮殿で、天皇が憲法原本を総理大臣の黒田清隆に手わたした。(東京・憲政記念館蔵)

憲法を賞賛した内外の声

憲法が発布されると、政府批判の論陣を張ってきた新聞も、「聞きしにまさる良憲法」、「実に称賛すべき憲法」などと称えた。また、憲法は翻訳されて、世界各国に通告された。イギリスの新聞は、「東洋の地で、周到な準備の末に、議会制憲法が成立したのは何か夢のような話だ。これは偉大な試みだ」と書いた。イギリスのある学者は、日本の憲法が古来の歴史と習慣をもととした穩健な立場でつくられ

ていることがもっとも賛成できる点である、と述べた。ドイツのある法律家は、議会を両院に分け、衆議院のほかに貴族院を設けた知恵を高く評価した。その理由は、どこの国でも下院(衆議院)は急進的になるものだが、その暴走による社会不安を和らげるには、国に対する責任感と良識のある人々からなる上院(貴族院)が欠かせない、というものだった。